



せせらぎ Message 17

平成24年3月27日発行
こだいら 水と緑の会

「小平の用水路」を小平市指定文化財に！

佐藤 忠彦

昔（10年位前）「玉川上水を世界遺産に！」という呼びかけが、確か小平ユネスコ協会で行われていたと記憶しております。着想はよかったですですが世界文化遺産には6つの基準というものがあまして、検討したところ、この6条件をクリアーするのは難しいということになって、この話は立ち消えになっているようです。代わりにという訳でもないでしょうが、平成15年8月27日に文化財保護法に基づく史蹟に指定されました。

小川寺境内にある「小川九郎兵衛墓」は昭和62年3月31日に小平市史蹟第三号に指定されております。ちなみに「小川寺梵鐘」は同時に小平市有形文化財第四号に指定されております。また、神明宮境内にある「小川村開拓碑」は翌年の昭和63年3月31日に小平市有形文化財第六号に指定されております。

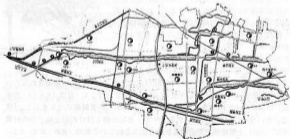


ならばバランスから考えて「用水路」も小平市指定文化財になって当然ではないかと考えたのですが、昭和63年当時は「用水路」は国のものでした。そのために指定されなかったのかも知れません。しかし平成17年3月31日をもって「里道（りどう）・用水路」は国から小平市へ譲与（譲渡）され、小平市の所管財産になりました。「里道」というのは聞き慣れない言葉ですが、登記所備え付けの旧土地台帳の付属地図（公図）上無番地で赤色の長狭線で記入されている敷地（通称「赤道」あるいは三多摩地方では「朱引道」とも言われています。）で幅員が1間（1.8m）の敷地である傾向があります。昔は人が足しげく往来した通路、耕作のために設けられた通路として利用されていたもので、現在では市道や私道の一部を構成していま

す。また、生活道路としての路地道・便利道等としての利用も期待されています。「用水路」は登記所備え付けの旧土地台帳の付属地図上無番地で水色の長狭線で記入されている敷地（通称「青線」「青道」とも言われます）で幅員が2間（3.6m）の敷地である傾向があります。昔は用水路（故用・灌漑用）や排水路（雨水・雑排水）として利用されていたもので、現在では環境資源として見直されています。

更に、平成18年3月30日をもって地方分権一括法により、市内を流れる用水路の所有権が国から市に譲与されました。この用水路の大部分は、書通りの開渠で、幅は約3.6mが多く、その延長は約55kmにも達します。現在水の流れている用水路は全体の約3分の1で、その水源は多摩川からの水です。しかし、水量はわずかで、全ての用水路に水を流すことは出来ません。そのため、市内の用水路の水辺環境が著しく悪化し、ところどころで荒廃が見られ残念です。

小平市では手をこまねいていた訳ではなく、平成5年度には用水路の活用計画に関する市民アンケートを実施しました。その結果は ①水と緑のやすらぎ空間として欲しい。 ②水を流し清流を復活して欲しい。 ③遊歩道としてくつろげる空間として欲しい。 ④子供が安全に楽しく遊べるようにして欲しい。 ⑤用水とは名ばかりなので有効な利用をして欲しい。 ⑥歴史を振り返る場所として欲しい。 ⑦小平の名所となって欲しい。などと「清流復活と緑の保護」を望む意見が大部分を占めました。また、「自然との調和」・「清流の復活」「緑化の推進」への意見が多く、活用にあたっては、極端な人工的整備を避け、ありのままの自然を残しながら自然環境を保全していく整備が望まれています。



譲与される以前の平成7年3月には「小平市用水路活用計画」が策定され、平成13年4月には「小平市用水路条例」を施行して用水路の活用・整備・維持管理を行ってきました。カラー印刷のパンフレットも「水と緑のやすらぎ景観へ

小平市用水路活用計画」(平成7年3月、小平市建設部特定財産課)・「春の小川の創生により 用水路に水と緑のやすらぎ景観を残しましょう～小平市用水路活用計画」(水と緑と公園課)と作成され、平成21年3月には改訂版が発行されています。この中には用水路活用計画の基本的な考え方として「歴史的文化遺産としての用水路の役割を見直しながら・・・」と謳っており、小平市指定文化財への指定を暗示しております。

折しも、平成24年は小平市は市制施行50周年を迎え、いくつかの記念事業が計画されております。特に9月には玉川上水流域の7市区が参加して現状を踏まえ将来像を探る「玉川上水サミット」が計画されております。玉川上水と用水路や野火止用水は「水と緑のやすらぎ景観」という観点からも、また同じ多摩川の水を分けた歴史的観点からも兄弟姉妹とも言うべき関係にあります。

更に前掲の用水路パンフレットには「小平市用水路の親水および緑道利用敷地の愛称」(この長ったらしい名称にはお役所の匂いがして嫌ですが今は我慢して)12箇所あるうちの7箇所は、なんと「市制施行40周年記念事業により愛称が選定された」とありました。10年を経過して用水路が市民に親しまれ愛されてきたかについては疑問無しとしませんが、その反省をもこめてこの際、広く市民に喚起を促す意味合いからも、市内に今も昔の面影を残す用水路を、この貴重な景観を文化財に指定して「玉川上水サミット」に臨み、次の世代に残していきたいものです。

平成23年度 会計報告

(会計 佐藤 忠彦)

収 入	金 額	支 出	金 額
前年度繰越金	92,479	活 動 費	4,461
会 費	38,000	通 信 費	300
		次年度繰越金	125,718
合 計	130,479	合 計	130,479

☆会の運営は会費で賄っています。平成24年度の会費の納入をお願いします

平成23年度 活動報告

- ① 毎月第一・第三水曜日 10:00～ グリーンロード親水公園整備
- ② 毎月第四水曜日 10:00～ 「青らんぎ」にて定例会
- ③ グリーンフェスティバル参加
- ④ 「小平の用水路」のパンフレットを使用しての出前授業実施(3・7・12小)

平成24年度 活動予定

本年度は小平市市制50周年にあたります。市の方でもいくつかの記念事業が予定されていますが、5月12日～13日には「花いっぱい全国大会 IN 小平」が開催され、メインのイベントとしてグリーンフェスティバルが位置づけられています。全国から人々が来られます。小平市をアピールするいい機会かと思しますので、多数の方々の参加で盛り上げたいと望みます。

- 1、毎月第一・第三水曜日 10:00～ グリーンロード親水公園整備
- 2、毎月第二水曜日 10:00～ 小川緑地整備・小川用水清掃
- 3、毎月第四水曜日 10:00～ 「青らんご」にて定例会
- 4、グリーンフェスティバル参加 5/13(日) 10:00～16:00 雨天決行

- ① 本年度はグリーンフェスティバルも20周年を迎えます。運営委員会では全体のテーマとして「緑の再生」を掲げ、市内の幼稚園・小学校の協力を得て、雑木林の再生運動を展開していくことになりました。ドングリから実生で苗を育てる予定でしたが、昨年は不作でしたので今回は一年物の苗を使用。
- ② 会場は小平市中央公園ですが従来の三角コーナー以外トラックも使用。ステージ・客席等設営。当日中央体育館は休館です。駐車場はそちらを利用。サテライト会場として「小平ふるさと村」・「平瀬田中館」、催事あり。





③ ステージは午前中は運営委員会の進行にて、「NPO法人 東京どんぐり自然学校」の山田氏からパネルを使つての「緑の再生」活動の説明・草笛演奏・FC東京選手のデモあり、午後は市内複数大学のダンスチームの運営。

④ 5/12 日「ルネ小平」での式典後、立川のホテルに宿泊された「花いっぱい」関係の人々を、5/13 日にシャトルバスにてグリーンフェスティバル会場まで輸送。来客予定数は5000人。



⑤ 記念植樹・苗木の無料配布・FC東京によるキックターゲット

⑥ 当会はパネル展示・用水路の生き物展示・スタンプラリー・パンフレット「小平の用水路」販売を予定。



☆小平市では小平駅前ロータリーに花壇・プランターを設けたり、花ボランティアの募集も実施しています。グリーンフェスティバル会場もプランターの設置・バルーンの入り口と賑やかなものになります。皆様も広報にご協力いただき、是非今年の催事を成功させましょう！！

☆☆グリーンフェスティバル運営委員会は、これまでのあり方から実行委員会形式を視野に入れての移行段階として位置づけられています。祭事後反省会を兼ねての意見交換があると思います。運営委員会形式だと祭事のやり方に意見が言えますが、会計は自由にはできません。その辺りも皆さん考えてみて下さい。



5、「全国一斉身近な水質検査」参加 6/3(日) 午前中

6、公民館主催ジュニア講座「用水路を知ろう」に協力 7月

7、9月 7市区による「玉川上水サミット」開催

8、10月 小平市市制50周年記念事業



9、50周年をうけ、当会も用水路の「公開学習会」を計画。10下旬。

これに伴い「用水路 昔語り 第一～第三集」の再版を検討中です。現在A4判ではなくA5判の原稿を整え、イラストを作成中。制作費用として民間の助成金に申請してありますが、まだ未確定。

また再版に関しては「水と緑と公園課」に打診しており、そちらの方で実現の運びとなるかも知れません。交渉中。





雑草に学ぶ

船津好明

雑草というより野草という方がよく聞こえる。しかし雑草という方が逆しさを感ずる。畑で作物に覆ぎって生える草は雑草といわれ、作物を負かすので、雑草は有害な草だと思われている。一方、野草は野山に自然に生えている草で、何ら害はないが畑に生えれば雑草とされ、取り除かれる。

こいだら水と緑の会は、市内を流れる用水路を整えているが、用水路の脇に狭いながらも野草区画があって、世話をしている。地面は耕さないから、栽培しているとはいえないが、育つ様子を見守っている。通りがかりの人は、放置状態の野草が雑草に見えて、管理者を怠慢だと思っだろう。

雑草の育ち具合を見ると、雑草の中にも強い草と弱い草があって、強い草が勢いよく伸びこり、弱い草を制圧してしまう。人間が他の生物より強くて、増えて地球を覆い、弱い生物を絶やしている様子と重なって見える。

野山で野草を採取し、栽培して増やしている人がいる。栽培しては、もはや野草とはいえないが、やはり野草と呼んでいる。栽培して観賞するための花をつける草も、元は野草・雑草であったに違いない。

鉢植えにされた珍しい野草が春の市（いち）で売っていたので、買って野草園の中に、鉢の大きさの程の囲みを掘って移植してみた。根付いたのは確かだが、その後あえて放置した。夏が過ぎて、植えた野草を見に行ったら、他の雑草が繁り、確認できなかった。植えた野草は以前に保護して育てられたもので、自力で育つ雑草と競争できずに姿を消したことは、人間社会への教訓として肝に銘じるものがある。その野草を守るには、人手によってその野草の周りの他の草を除いてやるなど、保護してやるほかはない。

雑草は役に立たないという印象があるが、実は役に立っている。世の中の多くの人は雑草嫌い、他人の庭の雑草を見ると、その家の人を不精と思う。しかし、植物の葉は炭酸同化作用で、葉から酸素を放出するという。雑草も同じで、空気を浄化している。また、雑草は虫などの餌になる。虫に食べられた葉は変形し、変色し、見かけはよくないが虫などを育てている。虫が増えると鳥が来て捕食する。虫も鳥も昔から自然にいる生き物で、昔のようにいることが自然なのである。こうして雑草は自然を守っている。世界的に重視されつつある生物多様性という考え方からも、雑草の存在は意義深い。

ところが近年、雑草や薬の繁り方が異様に見える。葉は青く繁り、虫食いもない。葉の酸素放出はよいが、虫が少なくなっているらしい。だから鳥も来ない。不自然というべきであろう。原因は何か。自然が失われて、人は被害意識に目覚めるが、自分たちが加害者であることに気付きたいものである。

こいだら水と緑の会は、自然の川のない小平を用水路の水で潤し、雑草を含めて全ての生き物が本来の自然の姿で生き、それで人々の心が癒されることを目標に活動している。



ナラ枯病と包括的生態破壊

馬場政孝

昨年9月21日東京を襲った台風15号は、玉川上水や周辺の雑木林の木々に大きな損害をもたらした。直径が30センチを超えるような太いコナラやクスギが根元から折れているものがあちこちで見られ、上から落ちてきた大きな枝で玉川上水の橋が傷を負っていた。小平の玉川上水沿いの家に住むようになって30年経つが、こんな凄まじい光景を見るのは初めてである。玉川上水の遊歩道を朝夕2回犬を連れて散歩するのが日課となっており、これらの倒木などがかたづけられるまでのあいだ、毎日このような荒れた光景を目の当たりにしなければならなかったのは辛いことであった。

この台風でコナラ、クスギの小枝が大量に飛び散っているのが見られたが、不思議なことにどの小枝にもドングリがついていない。例年だと、強い風が吹いた後にはきまってまだ熟していない青いドングリをつけた小枝が落ちていたものであるが、昨年はドングリをつけた小枝を見つけることは出来なかった。1個もないのである。ブナ科の樹木には8年に1度ドングリ実年というものがあるという。このときには、クマなどの動物にいくら食べられても子孫を残せるよう大量のドングリをまきちらす。一昨年の秋にはたしか足の踏み場もないほどたくさんドングリが玉川上水の遊歩道にはあった記憶がある。その前の年にはまったく見られなかった。以前はドングリが全く見られないということではなかった。多い、少ないということはあったかもしれないが、まったくない、ということではなかった。最近ではドングリ不実年と実り年が極端に現れるようになっていて、何らかの原因で木の生理が狂いだしているのではないかと心配である。

昨午秋に新潟県の津南（長野県との県境）というところに滞在したとき、宿の周囲のブナ林を散策して驚いたことがある。ミズナラの大水がいたるところで枯れ、無残な姿をさらしているのである。林の中を進むと不自然にゴックリ空いたところがある。ミズナラの樹冠で覆われていたところである。しばらく歩くうちにその数が相当のものであることが分かってくる。この確々しい光景もまた凄まじいものであった。

ナラの枯れ死は日本海側を中心に全国広範囲におこっている現象のようである。カシノキタイムシという5ミリほどの甲虫が媒介するナラ菌によるものとされている。この菌はもともとふつうに存在していたもので、なぜ最近になって広範囲に蔓延をふるようになったのであろうか。

ここで思い出すのは1988年、北海道で大量のゴマダラアザラシやハイイロアザラシが死んで、オランダなどの海岸に打ち上げられた出来事である。調べてみると直接の死因はウィルスによって犬のジステンパーと同じような症状が出て死に至ったということであった。しかし、このウィルスは以前からふつうに存在していたもので、アザラシはこのウィルスで死ぬようなことはなかった。さらに調べてわかったことは、アザラシの脂肪の中に、北海に流れ込むPCB（ポリ塩化ビフェニール）などの化学物質が高濃度に蓄積しており、こ



れが免疫力を弱めてアザラシの大量死をもたらした、というものであった。この説も確認されているわけではなく、いまだ真の原因は突き止められていない。

ナラの枯れ死もアザラシの場合と同じような事情があるのではないだろうか。樹木の集団的枯れ死はナラ類に限ったことではなく、松枯れはナラ類に先行して蔓延をふるっていたし、その後、シラビソ、マンサク、ミズキ、ケンボナンなどに広がっている。自然生態の包括的破壊が進行しているようなありさまである。松枯れはマツノザイセンチュウ、シラビソについてはタリタケ菌というように、それぞれに固有の直接的原因を持っているようであるが、これらの菌類、寄生虫、ウィルスは従前より植物の環境中に存在し、いわば共生関係にあった。樹木たちはこれらに対する強い免疫力によって、共生関係を維持してきたのではないだろうか。この免疫力が失われるか弱くなった結果、共生関係が崩れ、枯れ死に至ったのではないだろうか。

免疫力を弱めた原因を特定することは難しいだろう。総じて、今日の人間の生産・消費を通して営まれる人間の活動そのものが根底にあることは間違いない。大量のエネルギーと自然資源を消費し、人工物を作り出して環境中に廃棄し、自然界には存在しない化学物質や、挙句、放射能まで放出するわけであるから、人間の今日的活動そのものが包括的生態破壊となっていることは容易に理解できる。

編集後記

今年の3月に小川一丁目のコカ・コーラ前の小川用水の整備工事が完了しました。地元の方々からの意見も取り入れ公園側の1氏が設計を担当したのですが、素晴らしい空間が出来あがりました。木种で囲われた目玉は歩道側に迂回し、通行く人々の目に留まるよう工夫されています。遊歩道の奥は緑い壁山となり植栽はまだ少ないですが、やがてはいいまげ畑となることでしょう。3本のケヤキはそのままだかさされ、春に鮮やかな新緑で目を癒しませてくれることでしょう。工事中「あいばり」場りに立ち会いましたが、ハヤの幼魚・川ユビ・ザリガニ・サゴ・カワノナを確認しました。完成後に見に行った時は、近くの保育園児童が歓声を上げながら元気に遊歩道を駆け回っていました。この工事に伴いブロック壁を自主的に撤去しフェンスに替えて下さったコカ・コーラ社に感謝いたします。



問い合わせ：042-345-6772（馬場）

当会HP：http://www009.upp.se-net.ne.jp/watergreen/